



加藤久智社長が母校である愛知学院大学を訪ね、恩師であり現学長の**大野榮人氏**と**伝統と革新**について語り合います。

伝統と革新を考える



学生さんたちには、命がけの教育を行い、自信を持たせて社会へ送り出す責任が大学にはある。変化する世の中に対応できる人材を出せなければ、大学の意味がありませんから。

大野 榮人 [おおの・ひでと]

- 1944年広島県生まれ
- 1967年駒澤大学 佛教学部佛教学科卒業
- 1970年大谷大学 文学研究科佛教学専攻 修士課程修了
- 1981年日本印度学佛教学会賞受賞
- 2008年東海印度学佛教学会学術賞受賞
- 愛知学院大学文学部長、同禅研究所長、同図書館情報センター館長、同副学長を歴任
- 2010年愛知学院大学学長就任
- 東海印度学佛教学会理事
- 日本印度学佛教学会理事

一人暮らしの方が最期をきちんとお迎えできるように、これからの葬儀社は葬儀だけではなく、その前と後をしっかりとフォローしていかなければならないと考えます。

加藤 久智 [かとう・ひさとむ]

- 1967年三重県桑名市生まれ
- 愛知学院大学文学部文学研究科 宗教学宗教学専攻 修士課程修了
- 南山大学大学院ビジネス研究科 ビジネス修士課程 修了 (MBA)
- 株式会社ほくせい代表取締役社長
- 株式会社花のホクセイ代表取締役
- 株式会社秋桜 秋桜交通 代表取締役
- (有)コスモスホールHD代表取締役
- 全日本葬祭業協同組合連合会 第20代青年部会部会長
- 全日本葬祭業協同組合連合会 政策委員会副委員長
- 三重県葬祭業協同組合 専務理事
- 厚生労働省認定技能審査 葬祭ディレクター1級
- KHK ISO審査センター 専門技術者
- 経済産業省認可全葬連認定 葬儀事前相談員
- 日本宗教学会 正会員
- 日本葬送文化学会 正会員



確かに社会で必要とされるものは知識だけではありませんね。(加藤)

加藤 本年、おかげさまで我が社は創立40周年を迎えることができました。これを機に、先生と対談させていただくことで、葬儀と宗教のあり方をしっかりと見つめまして、伝統と革新について考えてまいりたいと思います。

我が社は初代社長の時代より培ってまいりました「報恩感謝」の精神を社是に掲げておりますが、130年以上の長い伝統を誇る貴校の建学の精神「行学一体・報恩感謝」について伺いたします。

大野 本校は曹洞宗立の大学で、もとはお坊さんの養成学校だったものですから、曹洞宗を開かれた道元禅師の教えを要約した言葉「行学一体・報恩感謝」を掲げて、明治期以来建学の精神としています。行学の「行」の意味は座禅修行のことなんです。学びの基点を座禅修行に置く禅宗をベースにしていますから、学業一体ではなく、あえて行学一体なんですね。学生さんには、学問研究をしたことをさらに実践、これは報恩感謝にも繋がっていきますが、学んだことを実現できる人になってもらいたいです。理屈だけは立派だけれども行動が伴わない偏った人格ではなく、実行もできる人材を育てようという精神です。

報恩感謝の精神がありますから、もちろんベースは人間を磨くことですが、行学一体の行とは自分の生き方をきちんと身に付けることなんです。自分で将来のはっきりとした目標を早い時期に設定できて、実現するための方向性も定められる人の育成です。

加藤 確かに知識も必要だと思いますが、それだけで社会に出られた方に対しては、やはり企業側にとっては大変なのが現実です。

大野 「行学一体・報恩感謝」という言葉は、今の学生さんたちに伝わりにくいため、現代版建学の精神として、また目指す人間像を表現した「自分の可能性に挑戦し、協働の場で主体的に活躍できる人」を掲げました。協働というのは、お互いの心をつなげて学びや働く環境ができることで、大学でいえば、協働学習なんですよ。そのため、本校ではピア・サポートという仕組みを導入して、1、2年の学生さんを先輩や大学院の学生さんがサポートしています。

加藤 具体的にはどのような仕組みなんですか？
大野 先輩たちには、1、2年の卒業論文のテーマについてのディスカッションに参加してもらったり、グループ学習の指導などをさせています。教わるだけでなく、教える側に学生も入れて、お互いに学び合う、教え合うという環境を作ります。後輩たちは、自分もピア・サポートを行い、後輩を育てたいと思えるように、つまり、教わる側から教える側へと成長させることでもあります。

加藤 教える側にも学ぶことはかなり多いですね。

大野 もちろんです。教える側にならないと、知識は決して自分のものにはなりませんから。

きっかけさえ与えてあげれば、学生さんは力を発揮するんです。(大野)

大野 今、さまざまな大学が教育改革を行っているなかで、本校も、私が学長に就任してから、これまでの2年間は「建学の精神」をベースとした改革に費やしたんです。建学の精神を母体にした教育改革とは、一言で言えば先生方の意識改革なんです。先生方が従来のままの授業法でいいと言われれば、教育改革はできませんから。大学の教育とは、学生さんに自立してもらうことだと思うんです。自分で課題を見つけて、取り組んでもらえばいいわけです。手取り足取り教えるのは大学の教育ではないと思い、先生方には、大学は教えるだけでいいという考え方はやめて、学生さんに考えさせる授業をお願いしています。例えば、レポートを受け取るだけでなく、文章の訂正や考え方に対するコメントも入れて、点数をつけて返させるようにしました。そうすると、学生さんも本気になってくれるんですよ。凄いいレポートを書くようになっていきますよ。

加藤 そうやって考えていけば、さらに考える力が身に付きそうですし、普段から問題意識を持つようになりますね。

大野 そう。きっかけさえ与えてあげれば、学生さんはできるんですね。このように、大学の教育で大切なことは、学生さんにいかに厳しくできるかなんです。先生方の中には、学生は努力しないと言う方もいますが、それは、努力させていないんですよ。レポートを添削して返すことは、学生に努力させることはもちろんですが、実は労力が減る意味で先生方にとっての教育に対する意識改革でもあるんです。

また、昨年からは本学独自の教育システムを作り、高校までの学び、いわば暗記型の勉強から、自ら考え、課題を見だし、解説していくことを、特に初年次教育で徹底することにしました。1年の段階で学びの転換を図ってもらい、押し付けられたことではなく、自分が主体になって学んでもらう狙いです。

さらに、大学は学生さんが4年間学んだ成果を出さなければいけないと考えますから、学生さんの成果を明確にするために、カリキュラムマトリックスを作成して、この授業ではこれらの力を付けますと先生方に約束してもらっています。そして、学生さんに、アンケートで本当にその力が付いたかどうかを確認しています。

転換を迎えるということは、実は建学の精神に近づいているんですね。(加藤)

大野 大学には教育と研究、そして社会貢献の3つの命題が

あるんです。社会貢献は報恩感謝の精神に通じていますね。本校の学生さんたちは東北の被災地へ毎年4月ボランティアに行ってますが、一昨年行ってくれた学生さんたちは、地域のボランティアも始めたいと言いだしてくれたんです。昨年3月の初めのことです。空いている教室を使ってやりなさいと話したら、学生自ら、4月23日に立ち上げて開所式をしたんです。メディアも取材にきていただいて。活動内容は、学内イベントへのボランティア、地域交流、地域の祭、掃除まで、さまざまです。最初は50人くらいから始まったのが、今は学校全体で420人います。

加藤 素晴らしいですね。自主的に行ってみるんですよ。
大野 もちろんです。学校側には、お金もボランティアだから要りませんと言って、交通費も自腹で行ってます。全ての活動は、学生さんたちが企画立案して実行しています。我々が引き出してないだけで、学生さんは力を持っているんですよ。喚起すれば、学生さんって本当になんでもできるんだって、逆に教えられたんですよ。

加藤 学校がどんどん良くなっていきますね。
大野 良くなっていかないと、僕が学長になった意味がないですから(笑)。学生さんたちの変化にともない施設もどんどん変えていきますよ。コミュニケーションが苦手な学生さんでも、仲間を作るきっかけに役立ててもらえるように、コミュニケーションルームを設けています。また、グループ学習ができる設備を整えた図書館も建設予定で、将来は24時間開放したいと考えています。学生さんたちに主体的に動いてもらえる環境を用意するために、学校側は、施設の充実に、どんどんお金を使っていますよ(笑)。

加藤 まさに、ソフト面とハード面からサポートされているんですよ。学生さんたちは、地域などお世話になっている方々への感謝の気持ちをボランティアという形にしている。転換を迎えるということは、建学の精神に近づいているということですね。

時代のニーズを見て先取りしていく必要を感じますね。そうしないと、あらゆるものが生き残れないのかなと思っています。(大野)

大野 僕はお坊さんなんですけど、今の時代は葬儀も今までの既成概念では把握できないと思っているんですよ。

加藤 確かに、守るべきものは守りながら、変えるべきものは変えていく必要がありますね。

大野 名古屋は特に葬儀の形態が変わってきたんですよ。たくさんの方で葬儀を行うために、よそのお寺さんも呼んでいましたから、お寺専属のお坊さんはそれで生計を立ててきました。ところが今はほとんど家族葬です。

加藤 名古屋だけではないですね。ほんとうにここ数年で、家族葬が変わっていききました。

大野 形式にはこだわらないで、故人が生前好きだった葬儀法、例えば音楽葬など、時代のニーズを見て先取りしていく必要を感じますね。そうしないと、葬儀に限らず、あらゆるものが生き残れないのかなと思っています。ところが、大学は社会の厳しさを一番知らないんですよ。学生さんたちはみんな、社会という戦場に出て行かなければならないのに、それを教える先生が少しも戦場にいるという自覚がないわけですよ。戦いの場、実社会に巣立っていく学生さんのことを思えば、古いノートを持ち出して講義なんてできないはずですよ。

加藤 確かに、我々企業人は戦場で働いていると思ってますから。

大野 大学の先生にそういう意識がなければどうしようもない、最初に言いましたが、教育改革というのは先生方の意識改革ですからね。学生さんたちには、命がけの教育を行

い、自信を持たせて社会へ送り出す責任が大学にはあると思ってるんですよ。

加藤 貴校でピア・サポートやボランティア活動を経験されている学生さんたちは、我々から見たらまさに企業にとって即戦力の人材ですよ。今までとは違ったタイプの学生さんを育てていただいて送りだしていただいていると思います。

大野 彼らは目の輝きが違いますから。企業に入ったら即戦力になるだろうなと自信を持って送りだせます。

加藤 我が社にも、本当にこういう学生に来ていただきたいと思います。まさに企業が欲している人材は自ら計画して実行できる人間ですから。貴校のように即戦力となる人材を育てていただいて、そういった方々を我々が受け入れさせていただけるとするならば、まさにもう一歩先のことができるわけですからね。

しかし、会社ではどこでも人材育成が必要とされています。たとえば、家族葬が増えて、コミュニティが崩壊しつつある社会では、地域コミュニティがなければ誰が独居老人などの一人暮らしの方たちをサポートして葬儀を行うのかということが、今後ますます危惧されることです。本来であれば、一人暮らしの方々が自分らしい最期を迎えられるように、宗教家の方たちがサポートしながら、我々のような業者も協働するという形が今、ベストではないかなと思っています。一人で最期を迎える方たちに、「こういった形で葬儀をされたらどうですか?」と提案することで、人生を振り返っていただいて、その方に合った最期をご自身で考えていただけるんじゃないかと思えますから、我々はそれができる人材を育成しています。葬儀事前相談員とか葬祭ディレクター、コーディネーターなどですね。

葬儀社の使命はもう葬儀だけではないと考えています。(加藤)

加藤 近年、経済産業省がライフエンディングステージということで、自分たちの葬儀は自分たちでちゃんと考えていきましょうと提唱し始めたんです。その背景には葬儀費用の高さが消費者側から問題になってきたことや、その辺りの整理は業界内である程度解消されたのですが、プラス一人暮らしの方が多く、孤独死が懸念されるため、自分で最期のことを考えておいてくださいということですね。

大野 それはいいことですよ。

加藤 実際に孤独死されている方は多くいらっしゃるため、現実問題として向き合えなければなりません。ですから、我々は、葬儀だけじゃなくて、その前と後、ここをしっかりとフォローしていかないと、一人暮らしの方が最期をきちんと迎えることができないと痛感しています。



いかに世の中の変化に対応できるかが企業も大学も大切でしょうね。(大野)

大野 名古屋では安いことを売りにしてみえる葬儀社さんもございますが、全ての葬儀社さんには、公正な価格を提示していただけたらと思いますね。

加藤 それは、今は当たり前の時代になってきています。

大野 そうなんですね。事前に互助会的なものに入会して葬儀費用を抑えるという制度は今でもあるんですか?

加藤 ございますけど、その積立ではまかなえないことが現実ですね。

大野 そういうことも全部含めて、事前に費用のお話ができれば、独居老人の方ですと一番ありがたいでしょうね。

加藤 そうですね。すごく不安を感じてみえますので。また、葬儀で大切なのは、心のケアでしょうね。ご遺族を亡くされた方のお気持ちをどのように癒してさしあげるか。今までですと葬儀だけだったものが、これからの葬儀社は、お一人の方たちにきちんと葬儀をしていただくためにも葬儀前、つまりご相談、そして葬儀をさせていただいて、その後もちんちんと対応させていただくことまで必要とされていると思います。

大野 世の中全体が変わっているわけですから、いかにその変化に対応できるかが企業も大学も大切でしょうね。

加藤 葬儀でも、昔は誰も知らなかったから業界の言うことが通りましたが、今は情報社会の中で皆がいろいろなことを知っていますから。我々も大学も同様に、ますます善し悪しをシビアに評価されるでしょうね。

大野 そうですね。我々も古い頭でいましたけど、本当に変えていかなければいけないと考えていますよ。大学は、変わる世の中に対応できる人材を出せなければ、意味がないですから。

加藤 先生は、お世辞でも何でもなく20年前と全然変わりませんよね。お話を伺いながら懐かしく思いました。これからも元気で改革をお続けください。

